2018年度　　NB

国　語(B方式)

注　意

1. 問題は全部で9ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の ◯ を塗りつぶしなさい。◯で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

次の文章を読み、後の問いに答えよ。

清少納言が一条天皇の中宮定子に仕えた女房であり、その後宮サロンの花形であったことはよく知られている。定子は、藤原兼家の長男、中関白と呼ばれた道隆の娘で、永祚二年(九九〇)入内して中宮となるのだが、やがてその地位は、それに遅れること九年、長保元年(九九九)に入内した彰子のために奪われる。有名な『枕草子』は、清少納言が不遇のもと中宮、いまは名目だけ格上げされて皇后になった定子をなぐさめるために、機智とユーモアを書きつづったといわれているのである。彰子は、兼家の四男、つまり道隆の末弟にあたる道長の娘である。そして、その彰子に仕えて文筆の才腕をふるったのが紫式部だったとあれば、紫清二女のライヴァル*リイは、いよいよ宿命的なものにならざるをえなかっただろう。

いつだれが言い出したことかわからないのだが、清少納言が、「くもる藤氏」という物語を書こうとしたという話が、まことしやかに伝えられている。もちろん、これは伝説である。というより、だれかがいたずらに思いついたゴシップのたぐいだろう。しかし、あの才気煥発な清少納言のことだから、「光る源氏」の［　A　］として、それぐらいは書きかねないということで、後世、一部では意外に信じられていたかもしれない。道長の策謀によって、道隆の死後、定子をもりたてていた伊*周・隆家の中関白家は没落した。それを見守っていた清少納言の眼に、彰子腹の皇子をやがて後一条天皇とすることで、太政大臣として位人臣をきわめる御堂関白家の栄華が、面白かろうはずはないではないか。いまや再起不能の主家への同情。道長の権勢への反撥。定子を蹴落として国母となった彰子にくっついている紫式部への敵愾心。すべてこれらは「くもる藤氏」という発想にぴったりである。清少納言の晩年については、『古事談』[1]にあわれな話が書き残されている。零落した少納言が見るもすさまじいあばら屋に住まっている前を、殿上人が大ぜい車で通りかかった。さすがの才女もひどいありさまだなあ、とだれかが車中でいったのを聞きつけて、鬼のような顔つきの女法師が簾のかげから顔をつきだし、「おまえさんがた、駿*馬の骨を買わないのかい」と、どなったというのである。そんな落魄の姿の少納言が、ちびた筆をなめなめ、「くもる藤氏」の物語を構想している。たとえ嘘であっても、なかなかよくできた話ではないか。

『源氏物語』は、いうまでもなく、光源氏と呼ばれる人物を主人公にした物語である。しかし、それはどこまでも世にまれな美貌と才質に光りかがやく源氏の君個人の物語であって、いまいった[2]「くもる藤氏」に呼応する「光る源氏」の物語であったかどうかは、すこぶる疑わしい。事実は反対に、『紫式部日記』の記述によって、この物語が少なくとも一部が成立していたことが確認できる寛弘年間は、藤原氏が権力の絶頂に達していた時代であり、源氏、すなわち王孫の勢力は、まったく影が薄かったのである。『源氏物語』が書かれる背景になっていた時代は、「光る源氏」どころか、「くもる源氏」と「光る藤原」とでも呼ぶ方が正確であるような摂関政治の最盛期であった。ここから当然、だからこそ作者はあえて「光る源氏」の物語を書いたのだとする考え方が成立してくることになる。

江戸の国学者、村田春海に『源語提要』という小論がある。年次は明記されていないが、文中、[3]本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』への言及がないから、あるいは、その刊年である寛政十一年(一七九九)以前のものでもあろうか。ともかく春海は、この物語の執筆動機をこんなふうに論じているのである。

作者一部に主意あり。中ごろより、関相国(関白太政大臣)の位は、皆執柄の家(藤原摂関家)にありて、皇子たちは、たまたま左右の大臣に至り給ふ。其外は、多くは官称のあるまでなり。又僧となり給ふもおほし。御孫に至りては、世にかずまへられず。これをおもひて、光といふ皇子、ゆふぎり、薫などの、王孫をまうけて、極位あらしむ。

『源氏物語』の作因を、その頃逼塞(ひっそく)していた源氏の系族への同情あるいは共感のうちに見出すという考え方は、決して村田春海の独創ではない。つとに南北朝時代の貞治年間(一三六〇年代)に書かれた『河海抄』*に、「此物語のおこりに説々ありといへども、西宮左大臣、安和二年太宰権帥に左遷せられ給しかば、藤式部をさなくよりなれたてまつりおもひなげきける云々」とあるあたりが、この説のはじまりらしい。醍醐天皇の皇子で、臣籍降下して一世源氏となった源高明(西宮左大臣)の失脚事件は、右の文中にあるように、安和二年(九六九)のことであるから、とても年齢が合わないというので、この説は後世から否定されている。しかし、源高明がモデルであるかどうかはともかく、作者が心情的に源氏に加担して書いたとする説は、その後かなり信じられてきているのである。

春海の『源語提要』がこの説を取っていることの意味は、かたわらに、ほぼ同じ頃にできあがっている宣長の『玉の小櫛』を置いてみるとはっきりしてくる。もちろん、宣長が精魂をかたむけ、数十年をついやして完成したこの大著述と、わずか十八葉の片々たる小冊子とを、単純に並べたのでは均衡を失することはわかっている。けれども、宣長がその第一巻の「つくれるゆゑよし」の条で、この物語の執筆事由について、「此物語、いかなるよしにて作れりといふこと、さだかにしりがたし」と、問題をいとも簡単に解消してしまっているのを見ると、そこには何か、あらためて考えるべき事柄がひそんでいるような気がしてならなくなるのである。源氏同情説が正しいかどうかの問題ではない。宣長がいうような「もののあはれ」を旨としたとする説とは別のところに、或る執筆事由を想定してみる視座から、[4]『源氏物語』の世界のもう一つの奥行きがひらけてくることも、あるいはあるのではないだろうか。春海は、藤原氏全盛の世について、さらに続けていう。

他姓の女御、更衣に、皇子おはしても、中宮とはならず。ただ、藤氏のみ、后となり給へり。藤原にても、庶流にてはしからず。これより藤氏宗家の威権おもし。これをおもひて、源氏の女子をおほく中宮とせり。この時、春日御神*の託宣と称して、藤氏ならぬ后は、神の御心にかなはずなどいひなせり。これによりて、少女の巻に、源氏のうちしきり、后に居給はむこと、世のゆるしきこえずとかけり。

このようにして、われわれはようやく『源氏物語』第二十一帖の『少女』の巻のとばくちに達した。『源語提要』は、その書名どおり、この物語の主意を論じたみじかい総論であって、決して注釈の書物ではない。そのための不徹底やら不正確といった限度をいちおう承知しておいた上で、さてそれならば、春海がここで読みとるべしとしている主意に即することが、物語の内部にいかなる視界を切り開いて見せるかを、眺めてみることにしよう。

『少女』巻は、光源氏の三十三歳から三十五歳までの三年間の出来事を描いている。なかんずく、この間に源氏が太政大臣、つまり人臣として最高位にのぼったことが物語られる。しかもそれは、右大臣・左大臣という二つの要職をとばして、いっぺんにその位に達するという栄進であった。これは破格の人事といわなければならない。そもそも太政大臣というのは、かならずしも常時置かれる官職ではなかったのである。ところで、前引の箇所で春海が問題にしていた「源氏のうちしきり后に居給はむこと

云々」の語句は、じつは光源氏が太政大臣に昇進するくだりの直前に書かれている。『少女』の巻の本文を参照してみよう。

かくて、后居給ふべきを、斎宮の女御をこそは、母君も、御後見とゆづり聞え給ひしかば、と、大臣(光源氏)もことづけ給ふ。源氏のうちしきり后に居給はむこと、世の人許し聞えず。弘徽殿の、まづ人よりさきに参りたまひにしも如何など、内々に、[5]そなたかなたに心寄せ聞ゆる人々、おぼつかながり聞ゆ。

少しわかりにくいかもしれないが、要するにこういうことである。今上冷泉帝——実際には、源氏が父帝の中宮藤壺に生ませた自身の息子である——には何人もの后妃がいるが、その中からひとりを正式の皇后に立てなければならない。源氏は、いま後宮の梅壺にいる斎宮の女御を強力におしたというのである。この女御は、かつて源氏の情人であった故六条御息所の娘であり、その後、伊勢神宮の斎宮をつとめ、任期果てて入内したので、この名前で呼ばれる。源氏の養女であり、もとより王族である。その女性を、これもいまは亡き藤壺の口ぞえがあったという理由で推薦する。源氏自身も、この昔の情人の娘にまんざら気がなかったわけではないのだから、このあたり二重三重に、どことなく近親相姦的な「罪」の香りがたちこめている、といっていえなくもない。だがいまの場合、それにもまして強烈ににおってくるのは、[B]の動きなのである。

もっとも有力な皇后候補と世に目されていたのは、頭中将(『少女』巻では、はじめ右大将。源氏の太政大臣昇進と同時に、内大臣にのぼる)の娘である弘徽殿女御であった。冷泉帝の後宮へはだれよりも早く入内していて、いわば先着権を主張できる立場にいた。またもう一人、故藤壺の兄式部卿宮の娘である王女御という競争者もいた。冷泉帝の母后(つまり、故藤壺)の縁つづきというのであるから、この女性をおす方が筋がとおっていたはずである。かてて加えて、例の「源氏の打ちしきり后に居給はむこと」は如何なものか、という有力な世論があった。『花鳥余情』*はいう。「藤壺中宮の後斎宮女御の中宮に立給ふ事源氏のうちつづきといへり。かならずしも源氏の姓を賜はらざれども、帝王親王の御女をばみな源氏にとる也。心は藤原氏の后の中絶する事也」と。

結果はどうであったか。「なほ梅壺居給ひぬ。御幸のかくひきかへすぐれ給へりけるを、世の人驚き聞ゆ」と、事の次第が語られるように、源氏は強引に斎宮女御を立后させることに成功するのである。あざやかな政治力といわなければならない。その直

後に、源氏が太政大臣の位にのぼったのも、もちろん偶然ではありえない。ひとしくその手腕がさせたわざであろう。とはいえ、源氏はすべてを独占するほどの権勢欲の持ち主ではない。自分の前職である内大臣になった頭中将――『源氏物語』では、男性の作中人物は官職が変わってまぎらわしいので、便宜的にこの名前でとおすことになっている――に、「世の中の事どもまつりごち給ふべく、ゆづり聞え給ふ」と、作者は語っている。これは政治の表向きの実務を一任したというふうに解釈するのが正しいだろう。ここらへんにも、[6]かえって源氏という人物のスマートな政治感覚がうかがえるのである。

このように本文を読みたどってみると、春海が『源氏物語』の主意として論じていることは、あたかもその世界にさしこまれた*腔内鏡のような役割を果たしているといった印象になってくる。こんなことは、摂関家全盛の紫式部の時代にあるわけがなかった。だからこそ、紫式部は、この現実になかったし、またありえぬ、藤原氏と源氏のまぼろしの勢力逆転劇を描いたのだ、と春海はいうのである。その論断の［　C　］は、いまは問わない。ただ一つ確実に、この視座に見えてくる物語の内界があることが重要なのである。それは何かといえば、従来の有職故実にかかわる注釈の集積だけからではかならずしも明らかにならない、またとりわけ、同時代の『玉の小櫛』の主情主義アプローチによってはまったく切り取ることのできない、政治人間光源氏の輪郭である。

面白いことには、[7]この場合ものをいっているのは、『源語提要』の多分に教戒論的な物語の読み方であるように思われる。たとえば、夕顔の君がもののけに取り殺されるのは、すでに頭中将という男がありながら源氏に懸想した多情さの懲らしめとして書いたのだといった珍解も見られるけれども、こうした教戒論は決して一概に嫌うべきではないという気がする。それ自体としてはなるほど珍解ではあっても、それは結果として、良い意味での深読み、つまり、物語の読解に深度をもたらし、作中人物像を立体化するためのモメントにもなってゆくのである。教戒論というと、つねに儒教的な文学論のニュアンスがつきまとう。事実、そのとおりであろう。村田春海は国学者であったが、同じ賀茂真淵門からわかれた本居宣長とちがって、かたくなな儒教拒否の態度はとらなかった。この『源語提要』でも、「*漢学なくては、やまとだましひの、世に用をなさぬといふをしらせたり」といっているほどなのである。「大和魂」という言葉は、『少女』巻のほか、『大鏡』にも『今昔物語』にも用例が見え、もともとそれ

は、「漢才」、すなわち漢詩文の教養に対する実務処理能力といった意味だったらしい。後世の、日本民族固有の心性という語義とは、根本的にちがっていたのである。ちなみに、不思議なことには、『玉の小櫛』の『少女』巻の語注には、なぜかこの言葉は取り上げられていない。

（野口武彦『『源氏物語』を江戸から読む』による）

（注）

＊ライヴァルリイ…対抗意識。

＊伊周・隆家…定子の兄弟。

＊駿馬の骨…古代中国の説話。値千金の駿馬（脚の速い馬）を買い求めてくるよう命じられて出かけた者が、死んだ馬の骨を五百金で買って帰る。それを非難されたが、死馬ですら五百金で買ったのだから、その噂を聞いて駿馬が多く売られてくるだろうと答え、そのとおりになった、という。この逸話では、少し違った意味合いで用いている。

＊河海抄…四辻善成著。『源氏物語』の注釈書。

＊とても年齢が合わない…紫式部の生年は、高明の失脚より後の天延元年（九七三）頃と推定されている。

＊春日御神の託宣…皇族出身の后が出たときに、后は藤原氏から出すべきだ、という春日大社の託宣が出たことがある、ということ。

＊花鳥余情…室町時代の一条兼良による『源氏物語』の注釈書。

＊腔内鏡…治療や手術の際に、口や管などに差し込む鏡。

＊漢学なくては…『源氏物語』少女巻にある「才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ」という光源氏の言葉を受けている。

問一　[A]に入る最適な語を、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は[1]。

① リメイク　② パロディ　③ ライバル　④ クローン　⑤ スピンオフ

問二　傍線部1『古事談』は、十三世紀初頭に成立した説話集である。次の①～⑤の中からもっとも近い時代に成立した作品を選び、記号をマークせよ。解答欄番号は[2]。

① 大鏡　② 徒然草　③ 方丈記　④ 今昔物語集　⑤ 風姿花伝

問三　傍線部2「くもる藤氏」に呼応する「光る源氏」の物語」とあるが、それはどのような物語だと考えられるか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は[3]。

① 源氏と藤原氏が協調して政治を行う物語。
② 源氏が藤原氏を圧倒して栄華を極める物語。
③ 藤原氏の内紛に乗じて源氏が政権をとる物語。
④ さえない藤原氏と対照的な光源氏の君の栄華の物語。
⑤ 「くもる藤氏」の内容を受けて書かれた源氏の物語。

問四　傍線部3「本居宣長」の著作を次の①～⑤の中から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は[4]。

① 国家八論　② 胆大小心録　③ 折たく柴の記　④ 古事記伝　⑤ 南総里見八犬伝

問五　傍線部4「『源氏物語』の世界のもう一つの奥行き」とは、具体的にはどのようなことか。本文の趣旨に即して三十字以内で答えよ(句読点含む)。**問五は解答用紙(その2)を使用。**

問六　傍線部5「そなたかなたに心寄せ聞ゆる人々、おぼつかながり聞ゆ」を、現代語訳せよ。**問六は解答用紙(その2)を使用。**

問七　[B]に入れるのに最適な二字の語を本文中から選び、答えよ。**問七は解答用紙(その2)を使用。**

問八　傍線部6「かえって源氏という人物のスマートな政治感覚がうかがえる」とは、どのようなことか。この文章の趣旨に照らして最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 5 。

① 友人の頭中将に政治の実務を任せることによって、意思疎通の図りやすい二頭政治の独占体制を作る、ということ。
② 立后をめぐる競争に対して世間からの批判を受けないように、頭中将に重要な地位を譲ってみせた、ということ。
③ 権力を一人で独占せず、立后をめぐるライバルだった頭中将にも重要な地位を与える度量の広さがある、ということ。
④ 頭中将に内大臣という要職を与えることで、今後の状況でも彼を油断させようというしたたかさがある、ということ。
⑤ 次の争いに向けて、頭中将に自分と近い地位を与えることによって、できるだけ公平感を出そうとした、ということ。

問九　C に入れるのに最適な語を次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 6 。

① 優劣　② 善悪　③ 深浅　④ 当否　⑤ 正邪

問十　傍線部7「この場合ものをいっているのは、『源語提要』の多分に教戒論的な物語の読み方であるように思われる」とあるが、それはなぜか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7 。

① 教戒論的な物語の読み方が、一つの読みの軸を形成することで、作中人物を立体的に捉えることが可能になるから。
② 平安時代に栄華を極めた人物は、物語の光源氏を含めて基本的には儒教に基づいた倫理的な生き方をしていたから。
③ 教戒論的な物語の読み方は、藤原氏による権力の独占という歴史に対する風刺の力を明らかにすることができるから。
④ 物語を含めて文学は、単なる娯楽にとどまるものではなく、本質的には生きることをめぐる教えを含むものだから。
⑤ 『源氏物語』の主題は、本居宣長の唱えた「もののあはれ」ではなく、男女の恋愛も含む政治世界を描くことだったから。

問十一　この文章では、清少納言が「くもる藤氏」の物語を書こうとしたという伝説と、村田春海の『源氏物語』の読み方とはどのような関係にあるか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8 。

① 清少納言が、現実の政治の推移を読み切れず、定子とともに没落したように、村田春海も教戒論的な物語の読み方をしたため、『源氏物語』の読みが偏り、本居宣長には及ばなかった、という関係。

② 「くもる藤氏」は、『源氏物語』にヒントを得たおもしろおかしい伝説に過ぎないのに対して、村田春海は儒教に拠り所を持つまじめな読みによって、『源氏物語』の読み方を進歩させた、という関係。

③ 清少納言は紫式部への対抗意識から「くもる藤氏」を書こうとしたが、村田春海も本居宣長を意識して「もののあはれ」説への批判に相当する『源氏物語』の読み方をあらかじめ用意していた、という関係。

④ 「くもる藤氏」は、清少納言の道長への敗北意識というやや浅い執筆動機によるに過ぎないが、村田春海は歴史の現実と物語の内容から、紫式部の藤原氏への批判意識をよみとることに成功した、という関係。

⑤ 清少納言がみずからの属した集団に同情・共感して「くもる藤氏」を書こうとしたことと、村田春海が『源氏物語』の執筆動機に「源氏」一族への同情・共感を読みとったことに共通するものがある、という関係。